

小学校高学年における止まっているボールと投げられたボールに対する バッティングフォームの違いに関する研究

A study on the difference between batting forms of a ball resting on the tee and a thrown ball in higher grade students

1K07B201-9 宮川 央嗣

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 木村 和彦先生

【緒言】

2008（平成 20）年に改訂された学習指導要領では、ボールゲームの新しい枠組みとして「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の 3 つの形態が示された（文部科学省, 2008）。このような変更により、ベースボール型のボールゲームの位置づけがますます重要になってくることが予想される。

しかし、バッティングについては、投げられたボールをバットを用いて打ち返し、相手のいないスペースへ送り込むという高度な技術が要求されるため、技能が未熟な小学校段階においては、ボールをバットで打つという動作を取り扱わないハンドベースボールやキックベースボールが授業で取り入れられることが多い。

このような状況を改善していくために注目されているのが「ティーボール」である。ティーボールとは、野球やソフトボールと似たニュースポーツで、その特徴は打者がバッティングティーに置いたボールを打つことでプレイすることにある。（日本ティーボール協会, 2001）。誰もが平等に打てる点や、バッティングの際にボールや空振りがほとんどなく、ある程度短い時間で試合が進む点などから、小学校の体育授業で採用されるケースも増えつつある。

しかし、学習の進展に伴い、投げられたボールを打てるようになるための学習も保障していかなければならない。また、スキヤモンの発達曲線にみられる神経系の発達の観点からも、小学校中学年の段階で身体運動を制御したり、調整したりする調整力を養うために、投げられたボールを打つ経験は非常に効果的であるともいわれている。しかし、ある程度技能が発達した児童でなければ、投げられたボールを打つことは技術的に難しいことから、教師による適切な指導が必要になる。バッティングに関する学習プログラムや指導方法などについては、少年野球などの分野では数多くの指導書が発行されているが、小学校の体育授業を対象としたものはほとんどみられないことが指摘されている（中井ほか, 2007）。

本研究では、ティーボールからの発展として投げられたボールを打つために、まず止まったボールを打つ場合と投げられたボールを打つ場合ではバッティングフォームにどのような違いがあるのかを分析し、投げられたボールを打つためにはど

のような条件が必要になるのかについて考察していくことを目的とした。

【研究方法】

2010（平成 22）年 3 月 12 日に、埼玉県内にある A 小学校の 5 年生児童 34 人（男子 15 人、女子 19 人）を対象に、バッティングフォームと飛距離に関する測定を実施した。また、バッティング測定の結果を分析するための評価基準は、村上（1985）ならびに手塚（1999）が提唱するバッティング理論から、小学校高学年段階という発達段階を考慮して作成した。

【結果】

止まっているボールと投げられたボールでは、バッティングフォームに違いがあり、打球飛距離にも差がみられた。

バッティング飛距離を測定した結果、バッティングティーの場合が 11.38m、スローピッチの場合が 8.91m であった。このことから、児童にとってバッティングティーよりもスローピッチのほうが難易度が高いことが示唆された。また、男女別の飛距離をみると、バッティングティーとスローピッチとの間に男子では 0.8m、女子では 3.79m の差がみられた。

また、バッティングフォームを分析した結果、クラス全体の平均得点がバッティングティーで 1.87 点、スローピッチで 1.66 点であった。また、男女別でみると、男子はバッティングティーの場合よりもスローピッチの場合が 0.09 点、女子は 0.3 点低くなっていた。このことから、男子よりも女子のほうが投げられたボールを打つときにフォームを崩しやすいという示唆が得られた。過程別にみると、「構え」の段階ではほとんど得点の差はみられず、「ステップ」と「スイング」の段階において差がみられた。このことから、投げられたボールを打つためには「ステップ」や「スイング」に関する指導を行っていく必要があることが明らかになったといえる。

【今後の課題】

ベースボール型のボールゲームを小学校の体育授業に定着させていくために、今回得られた「ステップ」や「スイング」の動作に関するポイントを、ベースボール型のボールゲームが専門でない教師でも適切に指導できるような指導方法を開発していくことが必要である。